

自転車からお魚が 出てくる？

ゴミに住む生き物たち

文・写真

東 真七水

text & photo by Manami Azuma



「スキューバダイビング×ゴミ拾い×水中ごみ拾い」を専門としたダイビングショップ「Dr・blue」でゴミ拾いダイビングインストラクターを務める東真七水です。海底に沈んだゴミを楽しみながら回収し、水中ゴミ拾いを新たなマリンスポーツとして広める活動をしています。今回は私が沖縄の海で出会った「ゴミに住む生き物たち」をご紹介します。

ゴミの中を覗くと、小さな生き物と目が合うことも

海洋ゴミ問題と聞くと、魚網に絡まったウミガメや餌と間違えて誤食するクジラなど、命を脅かすイメージが先行します。しかし、その一方では生き物はゴミを棲家とし、海中で共存していることをご存知でしょうか。写真のように自転車の中で幼魚が暮らしていたり、ゴミの表面に卵を産みつけていたりもするのです。ダイバーは回収する前に必ずその確認をし、状況によってゴミをそのままにします。例えばゴミの資材がガラスの場合、深刻な環境汚染はないと判断し置いて帰ることが多いです。プラスチック

だった場合は、物理的だけでなく科学的にも海を汚染するという理由で、積極的に回収します。もちろんケースバイケースで、例外もありますが、生き物の命かそれともゴミの回収を優先するのか、都度判断しなければなりません。私は「どちらの方が絶対に正しい」という考えではなく、「どちらも正しい」と思っています。とはいえ、本来生き残れなかったはずの命がゴミによって延命されることで悪影響があるかもしれない、などと考え出すとキリがなく、生物多様性の視点も入れると非常に難しい問題です。だからこそ、水中ゴミ拾いは単純にゴミを拾うだけのアクティビティではなく、様々な葛藤を伴う奥深いアクティビティと思っています。生き物と目が合った瞬間に何を思い、どの



瓶の中を確認するダイバー

ような判断をするのか、正解はダイバーそれぞれなのです。

私がこうした生き物と出会った際、最初に出てくる感情は、「彼らはなんて逞しいんだろう」というリスベクトの気持ちです。ゴミすら受け入れ、一生懸命に生きる海の生き物たちが、いつか本来の環境で暮らせる日が来ることを願ってゴミを拾うと同時に、ゴミの中で暮らす生き物たちを時には見守り、その逞しさと深刻な現状を伝えていきたいと思っています。この写真を通して、どんな小さな命に対してもリスベクトを持ち、足元のゴミを拾うことの大切さに気づくきっかけとなりましたら幸いです。

Profile

奈良県生まれ。大学を卒業後化粧品会社に就職。沖縄の綺麗な海を守りたいと2020年に沖縄に移住し、2022年、水中ごみ拾い専門店Dr.blueを立ち上げる。
【Dr.blue ウェブサイト】
www.dr-blue.okinawa

